
人魚姫

日頃寝 ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫

【Nコード】

N6049R

【作者名】

日頃寝 ハル

【あらすじ】

人魚の王の末娘である人魚姫が、人間の男に恋をした。それは許されない恋。そして報われない恋だった。

昔々、まだ人魚と人間が思いあつて暮らしていた頃、人魚の王様がある決まりを作りました。

「人間に見られてはいけないこと」「人間の言葉を話してはいけないこと」

人魚達は人間のことが好きだったので、いきなり人間と交流することを禁じられ、納得出来ませんでした。王様に反発する人魚もいました。王様は彼らを全て捕らえ、大鯨に吞ませました。

それから人魚達は人間と交わることなく、人間も人魚の存在を忘れていきました。人魚は空想上の生き物と思われるようになったのです。

人魚王の末娘、ルディッシュ姫はとてもおてんばでした。世界のあらゆることに興味を持ち、色んな事を知りたがりました。時々浜辺に打ち上げられるハマグリの坊や達を深海の宮廷で捕まえては、海上の話を聞きました。

海上は太陽の光が燦々と照り付け、風がそよぎ、とても沢山の音で溢れている。そして見たこともないような生物が沢山いる。鳥、犬や猫、そして二本の足で立つという人間。

ルディッシュはハマグリ達の話聞いて、海上の世界を想像するのが大好きでした。話を聞くたびに、海上を見てみたいと思うようになったのです。しかし人魚達にはある決まりがありました。

「海から顔を出してはいけない」

そのルディッシュが生まれる前からの人魚達の約束は、ルディッシュを少しでも悩ませました。

そしてあるとき、ルディッシュは我慢しきれなくなり、貝殻を泡で固めた宮廷から飛び出し、太陽の光に向って真っ直ぐに海上に泳

いで行ってしまいました。誰にも言わずに。

どんどん海が明るくなり、波間が銀色に揺らいでいました。そつと顔を出すと、思っていたよりずっと太陽が眩しく、思わずルディッシュは目を瞑りました。息が苦しくなり、パクパクと口を動かすと身体の中に溜まっていた海水を吐き出しました。固まっついて、ほとんど機能していなかった肺が動き出しました。口からいっばいに空気を吸い、また口からいっばいに出す。感覚は新鮮でルディッシュは何度も繰り返しました。

手の平で太陽の光を遮りながら、周りを見回すと船が何隻も泊まっている港が遠くに見えました。ルディッシュは港を目指して泳ぎました。

風が皮膚に当たるのも、波が上下に動くのも、ルディッシュには初めてのことでした。海上に慣れてくると、音が聞こえるようになりました。最初ルディッシュは頭に響くその音で、自分が壊れてしまっうんじゃないかと心配しました。頭蓋が震える感覚は、時間が経つほどに大きくなりました。鳥や風の音でした。しだいにその音にも慣れ、ルディッシュは海底の音と何と違うものなんだろうと聞き入りました。

港は人気がありませんでした。海に出ている船もありません。ルディッシュは海から頭だけ出し、港を窺いました。

そこで出会ったのが、港を一人で歩いていた人間でした。

人間は泳いでいるルディッシュに気がつくと、ギョツとしたように立ち止まりました。ルディッシュは人間の瞳を見つめました。海よりも深い青色をした彼の瞳に吸い込まれそうに感じました。ルディッシュは声を掛けようと思いましたが、人間の言葉が分かりません。口から吐く空気は何も引つかからず、ただ漏れ出るだけでした。

「なんで泳いでいるの？」

人間は困ったように言いました。まだ泳ぐには肌寒く、しかもルディッシュは何も着ていないように見えます。

「寒くないの？」

人間は何も言わないルディッシュに背を向けて走り出しました。「待つて」とルディッシュは言おうと手を伸ばしましたが、やはり声を出すことは出来ませんでした。

人間はすぐに戻って来ました。手には真っ白いバスタオルを抱えていました。

ルディッシュは人間の手を借りて、初めて海から上がりました。

「キミは人魚なの？」

人間はルディッシュの透明に光る鱗や、太陽に透ける尾ひれを怖々と触りました。ルディッシュはくすぐったくてクスクスと笑いしました。喉に息が引っかけかり、ルディッシュの口から鈴の音のような笑い声が漏れました。

それからルディッシュは深海の宮廷に戻ることなく、海に面した洞穴に住みました。その人間に合うために。「他の人に見つかってはいけないよ」彼は言いました。ルディッシュとその人間は密かにその岩穴で会いました。しだいにルディッシュは人間の言葉を話せるようになりました。

人魚の王はルディッシュが帰って来ないことに、とても心配していました。ルディッシュが海上へ真っ直ぐに泳ぐ姿はイカの兵士が目撃していました。

「お父様、ルディッシュは人間に攫われてしまったんじゃないやありませんの？」

長女のゼジル姫が、どんな海草よりも艶やかな黒髪をゆたわせながら、王に言いました。

「お父様、人間はそんなに恐ろしい生き物なのですか？」

次女のエニミュー姫が、どんな珊瑚よりも鮮やかな赤い髪をゆたわせて、王に言いました。

王は話し始めました。人魚と人間の過去にあった話しを。

昔々、まだ人間と人魚が思い合つて暮らしていた頃。人魚が海の浅瀬に暮らしていた頃。人間は人魚を「海の神」と崇め、恐れていました。

人魚は愛した人間を海に引きずり込み、殺してしまいました。わざとではありません。その証拠に人魚は愛する人の亡骸を抱き寄せ、自らとともに大鯨に吞まれました。人魚は人間が海の中で生きられないことが理解出来なかったのです。

人魚の王は若い人魚達が人間を殺し、そして死んでいくことを嘆き悲しみました。そして自分の娘までもが人間と共に死んでしまつたとき、人魚達に二つの決まりごとを作りました。

「人間を見てはいけないこと」「人間の言葉を話してはいけないこと」

それが時が経つにつれ、「人魚は海から顔を出してはいけない」という一つの大きな約束に変わったのでした。

「ルディツシュは約束を破ってしまった。鯨に吞ませるしかあるまい」

王は苦しそうに顔を歪めて、二人の娘に言いました。娘達は父の苦痛が分かったので、何も言えませんでした。

ルディツシュはその人間に惹かれていきました。彼はルディツシュの話す海の中の世界の話しを目を輝かせて聞きました。ルディツシュも彼が話す地上の話しを興味深く聞きました。

「海の中へ泳いでみない？」

ある時ルディツシュは彼に言いました。ルディツシュは洞穴の光が

柔らかく差し込むひんやりとした海に半身浸かり、水が当たらない岩に座った彼の膝にもたれていました。彼は足だけ海に出して時々思い出したように足でバシャバシャと水をかき混ぜました。

「キミと二人で？」

「海の中は全てが海上とは違うの。とても静かで、淡いのよ」

人間はルディツシュの頬を撫でました。暖かい彼の手が心地良くてルディツシュは目を瞑りました。

「僕は海の中では生きられないんだ」

ルディツシュには、彼の言葉の意味が分かりませんでした。

洞穴で暮らしているルディツシュの元に父からの使いが来ました。ルディツシュは海上では海の声がとても鈍く高く聞こえるものだと驚きました。イルカの声はもつと澄んだ音だったのに。ルディツシュが聞いたのは死刑宣告でした。

ルディツシュはイルカから逃げました。洞穴のイルカが入ってこない狭い岩と岩の隙間に隠れました。

ルディツシュは隙間の中に何時間も隠れました。人魚の王に見放された今、助けを求められるのは人間である彼しかいませんでした。王の使者であるイルカは諦めて深海へ帰って行きました。

イルカがいなくなってもルディツシュは隠れ続けました。自分の尾にびっしりと並ぶ鱗を撫で、恨めしく見つめました。こんな尾がなければ、彼のように自分にも足があれば良かったのに。

洞穴に待ちわびた彼が入って来た時、ルディツシュは嬉しさのあまり思わず彼に抱きつきました。彼のシャツは濡れ、濃い色に染まっていたいましたが、彼は嫌な顔一つしませんでした。

陸に上がり、動けなくなってしまったルディツシュを彼は優しく抱きかかえ、海に戻しました。ルディツシュは言いました。

「この場所がお父様に見つかってしまっただわ。私は殺されてしまう」

「そんな。殺されるだなんて」

彼は少しの間、思案した顔をしていましたが言いました。

「じゃあ、キミを近くの湖に運ぶよ。海にいてはすぐに見つかるだろうから」

ルディツシュは彼が持ってきた箱の中に海水と一緒に入りました。きつとこれで大丈夫。私と彼の世界はまだ壊れない。ルディツシュは信じていました。

箱の蓋が開けられ、外を見たときルディツシュは驚きました。小さい湖の真ん中の台をぐるっと囲むように沢山の人がルディツシュを見て、歓声やら驚愕やら分らないような大きな声を上げていたからです。

訳が分からず、ルディツシュは箱から出され、湖に放り出されました。湖かと思ったらその水は真水ではなく海水でした。揺らりと泳ぐと人々は一際大きく歓声を上げました。

ルディツシュは彼の姿を探しました。しかしどこにも彼はいませんでした。

夜になって人がいなくなりました。耳の中に人の声が残って取れませんでした。ルディツシュは彼を呼びました。最初は心細く小さな声で、そして悲しさが増すにつれて次第に大きな声で、呼びました。

彼がルディツシュの名前を呼びました。振り向くと、会場の端に彼が立っていました。彼は言いました。

「ごめん。ごめんな。僕は騙されたんだ。キミがこんなに辛いことになるなんて思わなかったんだ」

水槽を隔てて、二人は手を合わせました。

「海水を出し入れする管がある。そこから逃げてくれ」

「あなたは？」

「僕は、僕は大丈夫だ。キミのことだけが心配なんだ」

彼の青い瞳から雫が零れ落ちました。ルディッシュは彼に触れたいと思いました。

「私は、お父様から殺されるわ。どこにもいる場所なんかないの。あなたと一緒にいたい」

彼はフツと笑いました。それから声を上げ笑い、

「じゃあ、二人で逃げよう。地の果てでも海の底まででも」

彼は水槽の堀を飛び越え、ルディッシュがいる海に飛び込みました。

ルディッシュは彼に深海の景色を見せてあげたいと思いました。海上の世界にはない、重く、神聖な海の色。無音の中に感じる音。しかしルディッシュが抱いて泳ぐ彼は苦しそうに空気を吐くと、動かなくなっていました。

ルディッシュは彼が寝ているのかと思いました。きっと疲れてしまったんだわ。ほら、辛そうな顔をしているもの。嫌な夢でも見ているのね。

王からの使者であるイルカが、静かにルディッシュの側に寄り添いました。イルカはルディッシュの二人の姉が王に自慢の髪を差し出し、ルディッシュの命を助けてくれるよう請うてくれたのだと言いました。

太陽の光がだんだんと薄くなる頃、髪を短く切った姉達がルディッシュを迎えに来ました。

起きて、私のお姉さま達よ

ルディッシュは彼の頬を包みました。ふうわりと海に揺らぐ彼は、白い顔をして動くことはありませんでした。

起きて。起きてったら！

ルディッシュは彼を抱きしめました。姉達はルディッシュの姿を見て、遅かったのだと悟りました。

もう死んでしまったのよ

だからルディツシュ、帰りましょう

しかしルディツシュは彼を抱きしめたまま、そこを離れませんでした。

ルディツシュは遠く見上げると、銀色に波打っているのを見ました。

「あなたの髪はキレイね。太陽の色。金色に光っているわ」

「僕？ 僕なんかよりキミの髪の方がキレイな色だよ」

いつか彼と話したことをゆっくりと思い出していました。

「私の色は、死んだ珊瑚の色よ。まっしろ。姉上達のような赤か黒が良かったわ」

ルディツシュが自分の髪をクルクルと触って遊ぶと、彼はルディツシュの手を握りました。

「キミは知らないと思うけど。キミの髪が、太陽の光に当たると、銀色に輝くんだ。僕が初めてキミに出会ったとき、僕はキミの髪にドキツとしてしまった」

ルディツシュは彼を見つめました。海よりも深い青い目。

「海の白波よりも清い、白い色だよ」

「ありがとう」

人魚は死ぬとその死体を大鯨に吞ませます。そうして死しても海を泳ぎ続けるのです。

ルディツシュは母の遺体を預けた鯨のところへ行きました。大きな鯨はルディツシュが胸に抱いた人間を見て驚いた顔をしました。ルディツシュの顔を見て、全てを知りました。

ありがとう

ルディツシュは大鯨に言いました。父や姉達、海の全ての生き物に感謝をしました。

大鯨が静かに口を大きく開けました。渦が起こり、ルディッシュの背中を押します。ルディッシュは彼をしつかりと抱いて、ゆつくりと泳ぎました。

地の果てでも、海の底でも、二人で

（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

ジャンルは童話、でいいですね？

ファンタジーかな。

感動、ご指摘、ご意見、宜しかったらお願いします。
ぽちっと評価、お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6049r/>

人魚姫

2011年4月12日01時28分発行